

羽田空港の国際化の効果等に関する調査

高田陽介前国際業務室長，三崎秀信招聘研究員，林泰三主任研究員，平田輝満前研究員，栗原剛研究員

1. 背景および目的

羽田空港（東京国際空港）は，平成16年度より進められてきた再拡張事業に係る各施設が完成し，平成22年（2010年）10月21日，新たな4本目の滑走路及び国際線地区の各施設（旅客ターミナル，貨物ターミナル，エプロン）が供用開始され，発着枠が大きく拡大した。これを受け，同年10月31日からは，国際定期便が本格的に就航し，24時間国際拠点空港化への第一歩を踏み出すに至っている。この「羽田空港の国際化」に伴い，同空港では，昼間時間帯（6～23時）においてはアジアの近距離定期便が運航するとともに，深夜早朝時間帯等においては欧米を含む世界の主要都市に向けて，新たな路線が就航しているところである。

こうした状況の下，本調査・研究においては，羽田空港の国際化に伴う，首都圏を中心とする国際線航空旅客の流動等への影響，実質的効果につき，実態を正確に把握することを主たる目的としている。首都圏空港の国際競争力のより一層の向上を可能にするためには，羽田・成田両空港の特質を最大限に活かしつつ，その利用者利便の向上に向けた取り組みを着実に進めていくことが肝要である。かかる認識の下，本調査・研究のアウトプットは，羽田・成田両空港の位置づけ，相互関係の見極めを行うための一助となりうるものである。また，今後とも増大が見込まれる首都圏国際航空需要への対処の在り方につき，この先詳細な検討が行われていくに際し，実質的かつ有効な材料とするものでもある，と考えられる。

2. 国際線航空旅客の動態

上述の背景事情を踏まえつつ，まずは国土交通省の「国際線航空旅客動態調査」のデータを活用しつつ，羽田空港の国際化に伴う国際線航空旅客の動態について把握した。

具体的には，まず羽田空港の国際化前後における国際線航空旅客の旅行目的に着目し，目的別旅客数，目的別旅客割合の推移について概観した。しかるのちに，羽田・成田両空港を含め

た出国空港別の旅客割合を航空旅客の居住地別に把握するとともに，空港へのアクセス時間の推移，首都圏空港の利用者が前日宿泊（前泊）する割合の推移，海外渡航に際しての出発・経由空港の変化（我が国首都圏空港によるハブ機能の回復度合い）等についても確認した。

3. 羽田・成田空港利用者による空港選択の実態

上述の国際線航空旅客の動態に係る状況把握を踏まえ，これら状況をより利用者に近い目線から評価すべく，ウェブアンケート調査を実施した。同調査は，直近1年間に羽田空港や成田空港等を経由して海外渡航した空港利用者を対象に，インターネットを活用して行ったものである。

同調査のポイントは，羽田・成田空港の利用者による空港選択理由，羽田空港国際化後の利便性に係る評価，羽田空港の国際化後における海外旅行回数であり，いずれも羽田空港の国際化による実質的な効果を，利用者サイドから検証しようとするものである。

4. 海外旅行商品の造成・販売への影響

ここでは羽田空港の国際化前後における海外旅行商品の内容等をフォローすることにより，羽田空港の国際化が旅行商品の造成・販売にどのような影響を与えているのか，実態把握を行った。本件については，日本旅行業協会に加入し，首都圏に本社を置く旅行会社を対象としたアンケート調査という形態により実施したものである。

同調査のポイントは，羽田空港の国際化後における海外旅行商品の造成・販売に関する基本スタンス，同国際化後に造成・販売された旅行商品の行先，羽田空港発着の旅行商品の特質，同国際化に伴う旅行商品の販売面における効果である。これらは，いずれも羽田空港の国際化に伴う実質的な効果を，旅行商品の造成・販売を行う供給サイドに着目しつつ検証しようとするものである。